

院内学級における異文化理解授業—台湾の学生との交流を通して

山本裕一*1, 謝昀叡*2, 小柳千佳子*3

*1北海道大学情報基盤センター, *2北海道大学国際広報メディア・観光学院, *3札幌市立北辰中学校

*1Information Initiative Center, Hokkaido University

Email:sierra@iic.hokudai.ac.jp

あらまし：病院内に設置された院内学級は病気の子供達が入院しながら学習する教室であり、学習の遅れを解消することが主な目的である。また個々の病状に応じた入院や治療によって閉鎖的な状況に置かれる子供達にとって、外部との交流は回復への意欲を育む重要な要素となり得る。北大病院内学級ひまわりでは外界との接触が困難な子供達が容易にコミュニケーションをとるためのツールとして双方向遠隔通信環境による遠隔教育を行っている。総合学習の一環として行う台湾の異文化理解授業を台湾からの留学生を通して実施すると共に今後、台湾で日本語を学ぶ学生と協調して行う予定である。本稿ではその概要について報告する。

キーワード：院内学級、異文化交流、遠隔授業、初・中等教育実践

1. はじめに

2012年に国のがん対策推進基本計画が策定され、小児がんは重点的に取り組むべき課題の一つに位置づけられた。小児がん患者と家族が安心して適切な医療や支援を受けられる環境を整備することを目指し、2013年2月には全国15の「小児がん拠点病院」が指定された。北海道では北海道大学病院が指定され、地域の小児がん診療の中心的役割を担っている。2019年には整備指針が見直され、AYA（思春期・若年成人）世代の患者の医療・支援にも対応できることなどが指定要件に追加された。北大病院では小児・AYA世代がんセンターが設置され、単なる治療のみならず、病気療養中であっても他の健康な子どもたちと可能な限り同じ生活・教育環境の中で医療や支援を受けられるような環境を整備することを目指しており、院内学級や地域の学校との連携を目指している。

2 北大病院院内学級ひまわり

北大病院院内学級ひまわりは札幌市内の小中学校の分校という形式であるが、道内外から治療のため北大病院に入院している子供たちを受け入れている。毎年、小学生30名、中学20程度受け入れている。第一義的な目的は長期や短期の入院のため生じる学習の遅れを少しでも解消することであるが、小児がん等の重篤な症状での入院や治療などで、空

間的にも心理的にも閉鎖的、抑圧的な状況に置かれやすい病気療養児の心理的な安定を図ることも大きな目的の一つである。そのために「気持ちの開放を図り、外に開かれた友人との交流を図る」ことは回復へ向けての意欲を育てることにつながる。北大病院内学級ひまわりではテレビ会議システムやWeb会議システム、SNSなどを用いて国内外のさまざまな人々と異文化交流をはかっている[1]。

3 院内学級のネットワーク環境

北大病院では医療用LANの他に北大の学内LANであるHIENSが一部に敷設されており、1Fの院内学級教室でも利用することが可能である。教室内のPCやiPad、TV会議システム、ネットワーク機器はHINESに接続されており、児童はこれらの機器を通じてインターネットに接続し調べ学習や、国内外からの遠隔授業に参加するために使用できる。またHINESの他に札幌市教育ネットワークにも参加しており、札幌市教育委員会が提供しているネットワーク資源等にアクセスすることが出来る。2021年度にはコロナ禍をきっかけとし、無菌管理中の入院児童や感染症の蔓延等で小児病棟から教室に来られない児童の学習の機会を保障するために、限定的な利用に限られるモバイルWiFiルータでなく、学内LANであるHINESを小児病棟に延伸し、無線LANのアクセスポイントを小児病棟の無菌室2室、学生実習室、プレイルームに設置することとした。無菌室

以外の児童は4, 5名程度が入室可能な学生実習室、もしくはプレイルームを利用する。ここではAPの他、高品質な映像、音声でのやり取りが可能なTV会議システムも設置したので、端末を利用しながら複数の児童が教室からの遠隔授業に参加することも可能である[2]。

4 複数の院内学級が参加する異文化学習

これまで我々は、総合学習の一環としてアラスカ大学、国立天文台ハワイ観測所、サウジアラビアキングサウド大学、北大北京オフィス、中国東北師範大学、ベトナム、マレーシア、台湾とテレビ会議システムで結んできた。「異文化理解・コミュニケーション、各教科の発展的補完の総合的な取り組みと位置づけるとともに、各教科の今後の学習の動機付けとなるべく授業を行ってきた。これらの海外からの遠隔授業は講師の都合等により定期的に行えないことや、授業を行えた場合でも病気療養児の容態により参加できる児童がわずかになってしまい、数少ない遠隔授業の機会を生かせない場合もあった。これまで主としてTV会議システムを利用してきたが、コロナ禍で急速に普及したZoomを利用することにより、大阪大学院内学級、関西医科大院内学級の他にも札幌市立山の手支援校、刀根山支援学校訪問部（ベッドサイド）の中で都合の合うサイトに参加してもらう事によって児童の不参加による授業の中止という事態を回避している。これまで機材や回線の問題で参加できなかったサイトの参加によりある程度年間計画を立てることができるようになった。今後は互いの教室で行われる異文化学習等で共有可能なものを増やしていければと考えている。

5 台湾に関する異文化理解授業

台湾に関する授業は2017年より北大に在籍する留学生等に依頼し実施している[3]。授業内容は台湾の地理、食文化、言語、学校生活、日本の漫画など多岐に渡っている。当初は阪大院内とTV会議システムで、関西医科大院内とSkypeにより合同で行ってきたが、前述したようにコロナ禍以降はZoomにより実施している。生徒数は各校で数名程度、学年は小学低学年から中高生まで参加している。台湾からの留学生による授業では、台湾の歴史や地理、食文化や行事、言語（挨拶、発音、繁体字）などについて

クイズも交えて紹介してもらっている。今年度後期からは台湾で日本語を学ぶ大学生による台湾文化を紹介する授業も計画している。台湾の大学生が日本の入院児童に対して行う台湾文化を紹介する授業は、台湾の学生にとっても教育効果があると考えられる。まず、日本語でプレゼンテーションを行うことで、日本語の実践的な運用能力を高めることができるのは勿論だが、台湾の学生は自分の国や文化を紹介することで、自分のアイデンティティや文化的な自覚を強めることができる。台湾は中国や日本などの影響を受けた多様な文化を持っているが、同時に独自の文化や特色も持っている。日本の入院児童に対して自分たちの文化を紹介することで、自分たちの文化について改めて調べたり考えたりすることができる。また、入院児童からの質問や感想を聞くことで、自分たちの文化がどう見られているか、どんな魅力があるかに気づくことができる。最後に、台湾の学生は日本の入院児童と交流することで、社会貢献や国際協力の意識を高めることができる。台湾の学生は日本語を学ぶ動機として、日本文化への興味や将来的に日本と関わる活動が生じることも考えられる。自分たちが持っている知識や技能を社会的に役立てられることを実感することができる。一方、日本側が恩恵を受けるばかりではなく、日本語授業の一環として成り立つように何らかの形でこちらからフィードバックするなど台湾側の授業計画に沿うことができればと考えている。

参考文献

- (1) 山本裕一、西堀ゆり、吉田徹、『掲示板型ツール「コラボード」と「コラボード広場」による院内学級での協調学習—院内学級での遠隔協調学習におけるシステム構築—』、教育システム情報学会第29回全国大会講演論文集、55-56(2004)
- (2) 山本裕一、井口晶裕、島田貴弘、小柳千佳子「小児病棟への学びのための高速ネットワークの導入について」、『大学ICT推進協議会2020年度年次大会論文集』FB1-4、296-297(2020)
- (3) 山本裕一、佐藤修、小柳千佳子、濱田和、佐藤聖子、西牧謙吾「TV会議システム、モバイル機器を利用した複数の院内学級による台湾に関する異文化理解授業」、『教育システム情報学会第44回全国大会講演論文集』、F6-2、437-438(2019)